

私は、既に八十一歳、妻は七十四歳、子供達もそれぞれ成長したが、引揚者としては恵まれていると感謝している。引揚者処遇問題に就いて政府との折衝等にお骨折り頂いている関係各位に深く敬意を表し、併せて今後の関係事業の推進に格別の御尽力をお願い致したい。

救われた我が命

東京都 中山 菊松

私は今迄に幾度か「通化事件」に関して、諸誌に断片的に投稿しておりましたが、この度は、私記として当時の私の個人的行動について記憶の明らかなうちに、とりまとめて書きのこしたいと思います。通化事件が起きたのは、昭和二十一年二月三日（一九四六）すなわち敗戦の翌年である。戦勝国の外国の地にとり残された敗戦国の日本人達は、助けを求めるところもならず、無政府状態の中でなされるままの、不安の日を過ごしていた。

旧満州国通化市（現、吉林省通化市）は、通化省一帯

の鉱山資源開発のための重要基地として沢山の日本人が働いていた。又山岳地帯であるために、ソ連軍の戦車等が侵入出来ないという地の利があつて、終戦直前には関東軍の死守の地として関東軍首脳をはじめ諸部隊が集結し要塞化されていた。従つて安全地帯と思うところに人は集まつて来るもので当時の満州国官宮内府一行、政府機関、それに満州各地からの軍人の家族、官公吏の家族、開拓者の家族、避難民、疎開者等々、今迄の何十倍もの人々が押し寄せて来たところで敗戦の八月十五日を迎えた。汽車もストップしてしまつて日本人は袋の鼠同様であつた。頼みの綱の関東軍の軍人達もソ連へ連行されたり、姿を消してしまつた。新たに組織された日本人居留民会も何の力もなく、食糧等生活必需品も没収される有様では明日の生活すら不安で、生きるあても帰国のあてもないながらもそれぞれが苦勞を尽くして敗戦から半年がすぎようとしていた。

その間、中国側の八路军（現中共軍）と中央軍（蒋介石軍）の交戦も通化一帯で度々あつたが、やがて通化は八路军の手に落ち、日本人もその軍政下におかれた。

このような状況下に、元帰国参謀長の藤田実彦大佐を中心に旧軍人のうちの戦闘的な若い将校達の日本人の窮状を打開のためやむにやまれぬ作戦計画のもとで発生したのがいわゆる「通化二、三事件」である。

当時の状況から判断して、軍官民合同作戦で戦うはずであったものの事前に八路側に発覚し、武器もとのわぬ一部の攻撃だけで敗北し、そのために日本人男子は一人残らず連行され留置の身となった。僅か数日の間に殺害されたもの二千数百人と聞くが確かなことは厚生省でも掴んでいないという。当時のこのような時限の中では、特に民間人に多くの犠牲者を出したことは残念でならない。

当時私は三十歳で通化市東昌街で商売をしながら公立青年学校、警察学校、大使館等の囑託をし、殆ど当時は郷軍の指導に明け暮れていたものです。

私が戦闘に参加した時の任務は、公安局に留置されておられた宮内府一行（皇帝夫人等）の中の溥儀浩夫人と令嬢二人を助け出すのが目的であった。後になって聞くに他の攻撃斬込隊は敗退して一部だけが交戦したそうで

あるが、幸か不幸か公安局を占領した私達十数人は留置場の鍵を奪い、すべての入獄者を解放した。そして公安局の二階におられた浩夫人母子には戦況が収まり次第、救助に参りますからと申し上げて、砲弾の音に怖がる幼い令嬢を抱いてあやしていると一階の方では八路軍が進入したらしく、私を呼ぶ浜の声がある。駆け下りてみると交戦していたが、幾人かを切り倒すと敵は逃げ去った。その後六十人余りの監視兵達が部屋に居るのを見つめるや、浜と山本伍長が縄でくくりはじめたので私はそれをおしとどめて、片言の中国語で、「君達は悪くないのだから、おとなしくしていれば殺すようなことはしない」と説くと彼等は、「大人は心が良い」と頼りにしてきた。浜に命じて全員を二階の一室に收容する。

私は後から二階へ行くつもりで收容の終わるのを待っていた。すると後の方から突如、手榴弾の爆発する音があった。ふり返ると山本伍長が倒れている。駆け寄ってみると即死である。きつと山本の武装を恨んでやったものと思つたが合掌するのがやっとで、二階へ收容することに手をとられていると玄関から、次から次へと敵兵が

攻めて来る。浜は敵の銃剣を取りあげて突く。私は切る。負傷して救護所へ行った中村準尉の日本刀も共に三時間余り奮戦したが長時間の交戦で疲れ切ってしまった。階段に椅子を積上げて休んでいると敵もさるもの、上から目掛けて切りつけて来る。敵も疲れたか怖くなったか一時来なくなっても又やって来る。友軍はどうなったのか心配になって薄明るくなった外を眺めると多勢の八路军服を着た者が公安局の建物を包囲していることに気付いた。

浜も一緒に見ていると外から日本語で、「直ちに出て来れば何もしない。皆出て来るよう勧告する。日本人は負けたのだ。」これでは私達が多勢いるものと思っていられるらしいが、こちらはただの二人である。浩夫人に、「私と浜は此処で自決します。お助けできなくて申し訳ありません」とお詫びを申し上げると、「あなた方は自決どころか、私達が無事であることを本部に連絡してほしいのです」とおっしゃった。私は、「任務は必ず果たします。お体を充分お大切に。失礼します」と最後の言葉を交わして、私と浜は二階の窓から裏の鉄条網目かけ

て飛び下りた。二人共かすり傷一つ負わず日本刀で鉄条網を切り払って、油断している敵を後ろに、千メートル足らずの救護所へ全力をふりしぼって駆けこんだ。

二人共弾一つ当たらず助かった。今思い出すと無茶としかいようがない。走っている間、耳もとをビュッビュッと弾の飛んでいく音がかすかに聞こえながらも、よくも命中しなかったものだと自分でも信じられない。九死に一生を得た気持ちを嘔みしめながら負傷した人を見舞っている、家の前後から日本語で、「日本人の男子は全員出て来い」と大声で叫んでいる。これでは出ていかないわけにもいかないが浩夫人の連絡もあるし、ましてや私は即座に殺されるのは分かりきったこと、私は隠れるからと云って皆と別れた。

日本刀はペーチカに投げ入れ、台所にあった出刃包丁を持って住宅の半間の押入れの上の方に飛び上がって身をかくした。体は両肘で支え、両足は小指を押入れの細かい板の機に乗せて、着衣は真綿の厚く入った満服である。しばらくすると汗が出て流れ落ちるのを片手を額の下に据えて落ちる汗をすすった。片手は出刃包丁を喉元

に当て、見付ければ即座に自決の用意をしていた。

しばらくすると、どやどやと多勢の足音がして各部屋の床板をはいだり、天井を銃剣で突きさしたり、短銃を発砲するなど隅から隅までの搜索ぶりは、まことに徹底したものであった。私の隠れていた半間の押入れは襖を蹴破るなどしたが上を見ようとはしなかったので助かった。かわるがわる小隊が何回も、躍りになってさがしているのに難をのがれたが、隣の部屋の柱時計が朝の八時から夜の九時になるまで十三時間の緊張と体力の消耗は何とも言いつくせないものがあった。

今も時々往時を思い、自決もさることながら銃殺は免れなかったであろうことを、何ものかに救われた命に涙せずにはおれない。おかげでこうして下手ながらも書き留めおくことが出来るのである。

前日の午前二時頃家を出てから食事もせずに、公安局を占領しての戦いに三時間余、個人住宅の救護所にひそむこと十三時間、命拾いをしたものの空腹と一杯の水欲しさに耐えながら、しばらく手足を揉みほぐしている隣室から話し声や笑い声さえ聞こえてくる。その一人は

宮内府の人で、はじめて通化へ来られた頃は私宅で面倒を見た人であるが、知人の坂本君と恋仲になった。私の義兄は坂本君の結婚の世話をして坂本君が通化に一人住まいの時には面倒をみた若者だった。

私の兄の忠告もきかず坂本君とその宮内府の女性は、二人で共産思想の教育に熱中したため、私達の仲間から嫌われていたのである。日本人が不幸な目にあっている非常の事態の最中に大声で笑うのは許せない。一杯の水も貰う気になれなくなった私は、壁伝いに這うようにして中国人の家に行き、中国語で、水を一杯飲ませて欲しいと頼むと快く返事をして水をくれた。水を口に入れようとした時、八路の憲兵というのが突如、私を捕らえようとして来たので、ここで捕らえられてたまるものかとお上になり下になり取組んでいたが、私には、もはや、気力も体力もなくなってきた。私が「済まない」と合図すると相手も「済まないが自分の言う通りにしてくれ、悪くはない」と云う。とうとう囚われの身となった。疲労困憊の身を、あちこち引き廻され、拷問を受けて、更にもうろうとしてしまった。

今度は人民裁判にかけられるのだと覚悟をした。これは百パーセント生き残れないという強硬手段であった。

それこそ昼間も暗い地獄の部屋から他へ移される時は死刑になるのかと思つて観念していたが、しばらく経つと明るい部屋に移された。この部屋は、戦場で負傷して瀕死の人達、貫通銃創を受けた人達で私の周囲には重傷者ばかりが寄り集まつた。中には私の膝枕で、水をくれと繰り返しながら死んで行く人もいた。息をひきとる寸前の人が、「おばあさんにたのむ」と云うので、私がその人の口元に耳を傾けて聞きとろうとしているところを監視の兵に見られ、私は引き出されるや、「これは大人だ」と怒鳴りながら、鉄棒で殴りつけてきた。それが三、四人でやるから一たまりもない。その状況を見ていた人の話を後日に聞くと、私は死体となつて首に縄をかけられて廊下を引きずつて外へ放り出されたそうである。おそらく他の死体の中に放りこまれたのであろう。多分夜明け頃と思うが、どうも重苦しい感じがして喉が乾いたので、知らず知らずに手で何か掴んで口元に少しづつ入れていたのは雪であつたようだ。だんだんぼんやりと意

識が戻ってきた。手足も他の死体の間で冷えたというように凍りついていたのかもしれない。しばらく揉みほぐしている、かすかに建物の影が見えた。「ここは戸外だ。このままでは凍死してしまう」と気が付いて少しづつ這いずつて建物の方へ向かっていると着剣した兵隊が近寄つて来て、いきなり銃剣で刺そうとしたので右手で払つた瞬間、手首に傷を負い血が吹き出してきた。足許の小石を拾つて止血をしていると、「中山はいないか、大使館の中山はいないか」と日本語で大声あげて誰か近付いて来た。傍にいた銃剣の兵士は驚いて、何か謝っている様子だった。私を見るなり駆けつけたのは、八路の軍服を来た元大使館のボーイであつた。

直ちに二、三人の兵士に担がせて病院に運び、出血の手当をしてくれたが、私は出血のため意識がもうろうとしている。処置が終わると担架で、その建物の中の仮留置所へ入れられた。大使館のボーイが、まさか八路軍に入つていようとは思ひもよらなかつた。彼は敗戦となるや何時の間にか姿を消していた。

後日、聞くところでは、大使館員達は通化の川内主任

たちを同乗させて去って行ったということであった。私にも部隊へ電話があつて、「大使館の人達は日本へ引揚げる。直ちに帰って用意せよ」「私は帰るわけに行かない。日本人はこのままだうなるのか」「そんなことを云っている場合ではない。来なければ置いて行くよ」という言葉だった。翌日部隊長と副官が私にトラックへ乗れというので、乗ったトラックが管門を出るなり、これから兵隊狩りをするという。私は反対した。「日本は降伏したのだから兵隊は早く家族のもとに帰すべきではないか」と云うと部隊長は、「俺の命令だ、言うとおりにせよ」と云って、駅へ向かう兵隊達を次々にトラックに拾い上げる。私の近くにいる兵隊を逃げさせると、なんと部隊長は抜刀し私目がけて切りかかってきた。副官がそれを止めたから難なくすんだが私はトラックを飛び下りて部隊へ戻った。

後で副官が来て、私は中山の味方だ、部隊長といえども敗けたからには一般民と同じだ、早く始末をして部隊を去ろうではないかと。翌日、部隊長は食糧品を積みこんで家族と共にどこかへ去って行ったと聞く。(どうも

余談となり脱線したようですが)

大使館員が退去した後へ私が部隊から帰るとボーイがやって来て、私は退職金も何も取っていないがどうしてくれるか、という。私は困ったが放っておくわけにもいかず残っている樋口会計係は、家族が十人も居て明日の生活すら困っている様子なので、自分一人で支払うより外に道なしと思ひ、現金の外に家財道具は殆どボーイに渡した。それで納得したのか礼を云って帰っていった。こうしたことで、彼は真剣になって私を捜し出してくれたのだと思う。もう一つ似たようなことがあった。

先程、人民裁判にかけられて殆どの人が生きて帰った例がないのに私がどうして生き残ったのか、その理由は釈放されてから聞いた。

私が戦前奉天から通化へ来た時、洗濯物がいつの間になくなるのが度々あった。通化は朝鮮に近く朝鮮の人たちが沢山住んでいるが、失業者が多く治安も悪かった。私は今の職業安定所的な、半官半民の職業紹介所を設けて、所長の私が保証人となって各産業の工場等へ就労の斡旋をしていたことがある。彼等が終戦となるや通

化へ帰って来て、私の家を訪れて「あの時就職させて貰った御恩は今も忘れてはいない。所長が困った時は何時でも知らせて下さい」と言っていた。

私が人民裁判にかけられると知った彼等が、直ちに助命運動をしてくれたために私は生きて帰れたのだと聞かされて、感激の余り男泣きに泣いたのである。

八路軍の工作員になった日本人が私達を何度も引き出し留置したこともあったのに、民族は違っても、義理堅く恩に報いることを知っている人達は沢山いるということとを悟らされた。

最後の銃殺がやって来た

何度も危機を脱して命拾いをして来たが、獄中であつての日々に、私は自分の今までにとつた行動を正直に書くわしく書き綴つて提出していたので、やがてはここで最後の日があると覚悟していた。ある日「明朝、中山は銃殺」という告知があつた。いよいよ来たか、毎日こんな地獄に生きているよりも死んで極楽へ行かせてもらった方がどれだけ楽か知れない、何も考えないとはウソのようであるが、私は観念しきっていた。「今夜限り糞束二

つで過ぎた投獄生活も終わりだね」と独り言をつぶさきながら、いつものように、一つの糞束は背中に、一つは腹にだいて寝てしまったのであらう。

すると真夜中に火が真赤に燃え上つたと思うとその火には誰かが、神とも仏ともわからない人の形をしたものが見えたとたんに消えてしまった。何であつたのかぼんやりしてはつきりしなかつた。誰か最後の別れにでも来てくれたのかなどと思ひ流していた。

さて朝になって、いつもの番兵が普段は睨みつけているのに今朝はニコニコしているのでこちらも笑顔をするのと、「貴方は今日死にます」という。「よしよし満足だよ」と中国語で答えると彼は驚いた顔をした。高粱の粥を掌に受けてすする食事をすませて九時頃と思つたが二人の兵隊が連れに来た。履物がないので探していると、兵隊がサンダルの破れたのを持ってきたが、凍傷で足がふくれてなかなか入らない。足の親指にひっかけて外へ出たが雪の凍りついた細かい路地を下るので、サンダルは役に立たず、歩くさえ困難な状態で、二人の兵隊を支えられてやっと死刑台（土堤の上）の場所に辿りついた。す

でに土堤の上には三十数人が立たされていた。

遅れた原因は、私が歩けないのと、兵隊が道を間違え遠廻りしたためらしい。指揮官らしい人が近付いて来て、「君は後の番だ、ここで待っておれ」と日本語で言ったので、私はこの人ならわかると思い、「私は日本人の婦女子をあなた方が守ってくれる約束で死んでいくが、共産党は守ってくれますか」とそれこそ口角泡を飛ばして大声でしゃべりまくった。すると待っておれと言付けて上司らしい人のところへ行っておか語りあっていたが、しばらくすると私の方へ戻って来て、「お前はもう一度留置場に帰って修養しろ」と云った。私は又二人の兵隊に連れられて再び留置場入りとなった。

あの死刑台に立たされた日本人は、どういう方たちだったろうか。私が連行され十メートルほど歩いた頃一斉射撃の音とドスンという響きがあった。生きた心地がしないとはこの瞬間のことであると思った。

一難去って又一難と続き、これが最後と思った難をのがれ部屋に閉じこもっていると、先程の指揮者が来て、「君はどうしても殺す気になれなかった。これから共産

党の学校へ行って勉強すれば立派な党員になれるよ。これから日本軍憲兵隊の留置場に移りしばらくして解放されたら足の治療をして、治れば共産党幹部学校に入れるようにしておくが約束出来るか。君が死刑場で俺に約束したように、俺からも約束するぞ」。私の即答は「ハイ」だ。生きる望みとは裏腹に、まだまだ油断は出来ないという気がした。

今度移された留置場では、前とは違って家族との連絡が出来、食事や煙草なども不自由なく楽しい雰囲気である。しかし私は死んだものと覚悟しているので家族に知らせるなど到底出来ない。隣にいた十八歳の川上君と二人は食事の時間が一番辛かった。白米のおにぎりや弁当が差入れされて、いかにもおいしそうに見せびらかして食べる人を、二人は見ないようにしていたが何度も唾をのみこんだ。片や高粱の粥、片や白米の弁当、天と地のへだたり、六、七十人の中の一人も、おにぎり一つどうですかと言ってくれる人はなかった。

でも煙草だけは一本を一口づつ吸いこんで更に吐き出した煙をもう一度吸って、まわしのみした。二口でも吸

おうものなら次からはまわってこなかった。

或る日、いよいよ釈放されたが歩くことが出来ないの
で若い川上君に背負って貰って、久しぶりに娑婆に出て
自由の身となった。さて、これからどこへ行こうかと、
とまどったが人に背負われている体、一先づ義兄のここ
ろへ行くことにした。玄関に着くと線香の匂いがプンと
して来た。まさか義兄が死んだとは露知らず、中に入る
と私の姉が出て来て、「入ってはならない出て行きなさい」と言う。線香の一本でも頼んでもそれも許さない。姉の隣に立っていた義兄の弟は、私を睨みつけている。これでは姉の気持ちもわかるので私は歩けない足を引きずって（川上君は事態におどろいて立去った）家伝いに近くの中国人の家へ行ったらとろく快く受け入れてくれたので助かった。しかし夜になるとシラミとの戦いで大変だった。

一週間位たつと今度は「赤旗新聞」に毎日のように「中山斬込隊長戦死不明」とデカデカのっているのでは我慢のしようもない。万一、これ以上の迷惑を日本人にかけることになってはなるまいと思った。それから家内

が数日続けて持ってきてくれた新聞を見るなり自首を決意した。直ちに身仕度をして馬車を呼び、世話になった中国人硝子店の主人公と家内と二人に見送られて、義兄の殺害された朝鮮部隊の同じ場所死ねるようにと死の途についた。恐らく再び生きて帰ることもなからう、義兄も待っているだろうと、天を仰いで涙をかくした。

朝鮮部隊に着くや留置場に入れられることになった。そこで思いがけない人に出会った。以前から在郷軍人の指揮者として親しくしていた人が、（この戦闘に立ったのに生きていて）留置場外の掃除をしている。声はかけられないので目と目で合図しながらも、あちらは小さな声「馬鹿がなんで自首して来たのか、馬鹿だお前は馬鹿だ」といかにも口惜しげだ。彼の真の友情からの、馬鹿という言葉が耳にこびりついたまま留置場の鍵がガチャとかけられてしまった。普段でもうす気味悪い留置場で、この中で捕らえられた日本人がどれほど殺されたことか、ろくろく取り調べもしないで、三十八年間の恨みをはらすために、次から次と容赦なく殺害したという。義兄もきっとここで殺されたのであろう。早くこの世を去りた

いと思う。

金隊長の呼び出し

夜中の十二時も過ぎた頃、兵隊が、「金隊長から部屋へ連れて来いとのことだ。出て来い」と威張って言う。いよいよ最後の時が来たと思ひ、落着いて隊長の室に案内され、扉をあけるなり、金隊長が近寄って来て私の手をとり握手しながら深々と頭を下げられた。「中山さん、申し訳ない、うちの兵隊があなたの兄さん基志川さんを殺してしまって申しわけないことをしました。中山さんお許し下さい。お詫びしても兵隊を責めても基志川さんは生き返りません、本当に申し訳ありません」と達者な日本語で云われて驚いたのは私の方であった。

「基志川さんには、事件の前から中央軍との戦闘で戦死した同志の弔いを依頼し、何度も手厚い扱いをして葬って貰った恩人だったのに、何も知らない兵隊が殺したことを聞いて思案にくれていたところへあなたが自首してきたことを知り、何かの引き合わせではないかと思ひます。基志川さん隣りがカフエーで私達はいつもあなた方の行動を見ていたから何でもよく知っていたので、安心

して基志川さんに手伝ってもらっていたのです。中山さんの身元保証は、隊長として責任を持って私がしますから、これからは日本人のために、基志川さんの分も尽くして下さい。今夜は遅くても家へ帰して下さい。自首はとりつけて、兵隊を二人つけます。今後不安なことがあれば、いつでも知らせて下さい」と言った。

再び帰されて

帰る宛もなく二人の兵隊とは玄関で別れ、一人で又世話になっていた中国人の家に辿りついた。それから、凍傷の足も漢薬業組合の幹部の協力で切断せずに治り、約束の共産党幹部学校に入った。講習を受けて、明日が修了という前夜、受講生同志の議論をやっていて、誰かが天皇制打倒を論じたが私はこれに反対の論を唱えた。即座に私は退学させられた。翌日から修了者は隣組の指導に回っていたようである。

退学させられた私は、しばらくして今度は、コレラが蔓延している中に入って死ぬと言わんばかりの命令を受けた。当時、その地域には我身大事と医者も僧侶も近寄らなかった。私はそこで医者 of 真似ごとから僧侶の真似

ごとまでした。毎朝、消毒代わりに梅酢と支那酒を飲んで、体につけたりして、お寺の本堂で集団生活をしている避難民の母子達を見舞った。コレラで助からぬ母の枕元で幼児が遊んでいた、畳の上にはシラミが重くなって部厚く這っているのを、手でかきわけるようにして、一歩一歩患者に近づいて注射をしたりしたが、翌日に行つて見ると母娘とも死亡している。今度は住職の役を勤めて、お経をあげる。兵隊狩りをまぬがれた若い人たち二十人位が火葬場の役をつとめた。この人たちの中でも数人倒れてしまった。私も発熱で倒れたが、岩淵婦長の注射のおかげで助かった。栄養失調ながらも、やっと引揚げる事が出来た。そして昭和二十一年十月十五日命ながら博多に上陸したのである。

満州での終戦抑留に耐えて

沖繩県 大嶺 真 三

昭和十年五月、私は上間辰彦氏（地方警視で沖繩県保

安課長）が満州国熱河省公署に赴任した後呼寄せられ渡航、熱河省警務庁警務課勤務となる。「世界平和の理想を胸に高き誇りをもって五族協和」のスローガン、若い我々は胸打たれる年令であり満州建国のために大いに役立つ人生を求めて希望に湧いた時代であった。

現地人になりきることが先決だと決意し、吉林省滨江省に勤務する間は民間人との交流を一倍苦労したつもりである。昭和十三年七月張鼓峯事件が起り、翌年五月ノモンハン事件が発生し、北満地区は緊縛した時があり、その後関東軍大演習すなわち北方より南方に部隊輸送のかつてない大規模なもので部隊の大移動であるため、国民は極度の緊張感におそわれたのは事実であり、私はこの大演習に直接間接に参加した。それは昭和十六年の中頃から約五か月続けられたと思う。昭和十六年八月大東亜戦争と呼稱し皇軍は破竹の勢いで香港占領、続いてマニラ、比島上陸と南方方面に進撃、日本国民は勿論満州在住の日本人も歓喜の声を上げたものである。

昭和十八年、ニューギニア守備部隊の玉砕に始まり戦況は我が方に利あらず、昭和十九年七月七日サイパン島